

# 自立へ母子に「伴走」

母子施設(中)

りしたり、次々に問題が出てき

## ここにいるよ

沖縄子どもの貧困

第4部 支援の現場から  
(8)

「子どもがすくすく大きくなるんですよ。今まで全無状態がわからなかったのは」。那覇市母子生活支援センター「さくら」の支所長、澤本しほ代(30)の女性が、施設長の富貴都さんに子育ての悩みを話した。

「安全な場所に来て、今まで抑えられていたものが出てきたんだね。それは自然なことだよ。一人で抱えます。子どもたちははげで育てていく。気持ちが高ぶってきかなくなったら、後でコーヒ―飲みに来る？」

女性はさくらで生活を始めて約1年になる。夫の暴力(DV)から逃れ、生活は苦しいが、子どもたちが夜中に寝たり、不登校になったり、赤ちゃん泣

「精神的にいっぱいなきは職員に助けてもらったり、どう対応すればいいのか分からないときは相談したりする。冷静になれ、子どもたちにもよく対応できる。友達には遠慮して言いづらいことも職員には言える。」

「仕事だから大丈夫」と言ってもらえるので気が落ちる。DVの影響が、子どもたちはきょうだいけんがますます出てくる。職員のアドバイスを受け、手を出したらいけない、口で説明するようになり、と腹をくくって止めた」と力を込めた。

「イエスからの支援を徹底して」と富貴都さんは言う。

## 職員「受け入れることを徹底」



入所者(左)と談笑する富貴都さん。「さくら」のあちこちで、入所者と職員が会話する場面がみられる。那覇市首里鳥辺町の市母子生活支援センター

援は幅広い。子どもが寝ないと困っているときたら、居間に入って、寝かしつけ方を実践してみせる。

職員は、週に一度はケース会議を開き、情報を共有。支援のやり方がこれだいいのか確認する。母子支援員は育児スキルを専門的なトレーニングも受けている。だが「あくまでも支援は母子。こちらが子どもにアプローチしすぎると母子の関係が壊れてしまう」と母子支援員の山内真寿美さんは話す。

さくらの入所期間は最長2年。やがて施設を出て自立しなければならぬ。母親の中には、人に頼れない環境で育ち、SOSを出すのが苦手な人も多い。さくらを出ても、困ったときは他人に助けを求めたり、うまく社会資源を活用する方法を伝えることも重要な支援の一つだ。

「母子にとって、ここが新たな人生をスタートするための学び直し場になってくれたら。富貴都さんは願いを口にしたり。

(子どもの貧困)取材班・高橋園子

随時掲載